学力の基礎をきたえ どの子も伸ばす研究会ニュース

学力研の広場

ホームページアドレス　http:gakuryoku.info/

NO.３６９

２０２６.１１.７
学　力　研　発行
常任委員長　岸本ひとみ
ペイペイ銀行うぐいす支店 普:3607141

あなたのクラス、あなたの学校はガサガサしていませんか。「デジタル荒れ」は起こっていませんか。子どもたちは「主体性疲れ」を起こしていませんか。大きな教育改革や研究大会が行われると、必ず学力の低下と子どもたちの荒れが起こります。これは戦後の教育界のいわば常識です。それは教師が研修や取り組みで疲れ果て、じっくりと子どもたちに向き合うことができなくなるからです。

しかしそれだけではなく、昨今の研究内容を見ていると、子どもたちが大変だと思えるのです。それは、子どもたちが学力をつけるだけでも大変なのに、「自分で考え、選び、決め、行動し、その結果に責任を持つ力」を育てることを目的とするという主体性教育を、なにがしかの形で迫られているからです。また、自発性や自主性が重んじられ、子どもたちが自主性ぶったり、自発性ぶらされたりする「主体性搾取」のようなことが起こっているからです。

久保齋『不滅の一斉授業』(2026.12 東洋館出版)より

※「子どもたちの学力をつけるだけでも大変なのに」という記述にその通りだと思いました。学問でも武道でも、基礎・基本を疎かにしての応用・発展はないと思うのですが。さて、今回の特集は、今年８月に出版された久保先生の新著『不滅の一斉授業』を読んで、となっています。ぜひ、みなさんもご一読ください。　(荒井)

CONTENTS

◇特集　久保齋著『不滅の一斉授業』を読んで◇

子どもを伸ばす教師　宮本　哲・・・・・・・・・　２
久保齋著『不滅の一斉授業』を読んで（第２部の感想）　鈴木基久・・・・・・・・・　４
予習展開による授業づくりを実践してみて　吉田雅直・・・・・・・・・　６
久保齋著『不滅の一斉授業』を読んで　根無信行・・・・・・・・・　８
「言い換える力」を育てる　山口左知男・・・・・・・・１０
『不滅の一斉授業』からの学びを、どう生かすか　堀井克也・・・・・・・・・１２
ハウツーではなく本質を　岸本ひとみ・・・・・・・・１４

◇連載◇

「どの子も伸ばす」を本気で考える㉒「意欲格差」に負けない！公立小学校へ　岡本美穂・・・・・・・１６
考える力をつけるための授業の組み立て方㉘ 集団のなかでなら到達できること　荒井賢一・・・・・・・１８
教科書「を」と「で」で教え・学ぶ 社会歴史授業八「一語の奥にある社会にこだわる」　深澤英雄 ・・・・・・・２０
第20期先生のための学校・第１回の報告　荒井賢一・・・・・・・２２
局長・常任委員長だより　・・・・・・・２６
学力研カレンダー　・・・・・・・・・・２７

子どもを伸ばす教師

大阪教育サークルはやし　宮本哲

「不滅の一斉授業」

夏休みの全国大会でこの『不滅の一斉授業』と出会いました。久保先生の書かれた本は、今までに全て購入して読んでいます。私が今までに取り組んできた実践も久保先生から多くのヒントをいただきました。だから今も担任として教師を続けてこられたのも久保先生から多くのことを学ばせていただいたからです。ありがたいです。

思い起こせば、教職について十年未満だった頃は、久保先生の本を読んで、実践し、反省し、また読み直して、実践することの繰り返しでした。（久保先生の講座にたくさん参加させていただき、たくさんの刺激をいただきました。）

近年は、経験年数も重なり、それなりに授業や学級経営ができるようになってきた（勘違いです。）慢心からか、多くの本を読んでも読み流すことが増えていました。

しかし、『不滅の一斉授業』を読み進めていくと、普段している私の実践の意味、逆にもっと子どもたちの力を伸ばすことができるのではないだろかという反省、そして、明日の教室でやってみたいなと思える方法など、色々、考えることができ、多くの学びがありました。

本物の一斉授業をすることで日本の教育、子ども、教師、保護者など、必ず良くなっていくと実感できました。（より多くの教師にも読んでほしいと思っています。仲間にも勧めます。）

子どもが、生き生きと輝いている授業は、子ども、教師、保護者、地域もみんなが幸せになります。

けれども、今はタブレットを使い、ノートも取らずに授業することがよい授業であるという風潮があります。そういう授業をよく見かけます。こんなことをしていて本当に子どもたちは伸びて、幸せになれるのでしょうか。

「ある研究授業を通して」

私は今年度、移動になり新しい学校で勤務しています。この学校は、校内研で国語の研究をして、今年度が三年目になります。一年目は、物語文、二年目は説明文、そして今年は、書くことに重点を置いて研究を進めています。

二学期、六年生が「模型のまち」で研究授業をすることになっていました。そのクラスが国語の授業をする時、ラッキーなことに私の空き時間と重なっていたため、二時間目の授業から研究授業まですべての時間に見学することができました。

担任の先生は、二十年以上のベテランだったので、子どもとの関わり方、指示の出し方、子ども同士の関わり方などスムーズでした。

しかし、国語の授業を見学していてどの時間も違和感がありました。その違和感とは、子ども同士の発言につながりがないのです。久保先生の言葉を借りると豊かな交流する時間なのに、それができていないの

です。

このクラスの授業の大きな流れとしては、個人で考える時間、自由に移動して友だちと考える時間、そして全体交流、最後にまとめ、このような流れでした。

授業を見ていると子どもたちが一番、生き生きとして話していたのは、自由に移動して友だちと考える時間でした。普段から一緒にいる友だちと意見を話し合うことは、気持ち的に楽です。(批判的な意見がないから)けれども、これなら全員で学習する価値がなくなってしまいます。全員で交流する時にこそ、自分にはなかった考え方も出てきて学びが深まっていきます。本当の読解力もついてきます。

久保先生の授業ならば第一発言者が司会をして、子ども同士で言葉をつなげていき、最後に教師に言葉を戻します。

子どもたちだけで言葉が上手くつながらない時は、久保先生が、司会の進め方や話し方などを教えて、子どもたちができるようにしていきます。それが、教師がいる意味であると思います。

一斉授業を通して、子どものことをしっかり観察し、子どもたちの言葉や行動から色々な手立てを打ち続けるからこそ、子どもたちは安心して、伸びていけるはずです。

子どもたちが、教室で成長し続けるために一斉授業の良さを同じ学校の先生方と交流していきたいと思っています。

「漢字学習」

新しい学校に来て、最もびっくりしたことは、学びから逃げる子が多いということでした。

四年生の担任なのですが、授業中にトイレに行く、ノートを書かない、宿題をしないなど良い学習習慣は、多くの子どもたちが身につけていませんでした。当然、子どもたちの学習意欲は低く、テストで悪い点をとっても平気な顔をしていました。けれども、そういう部分もあれば、テストで分からない問題があると、イライラしてテストをぐちゃぐちゃにしてしまうこともありました。その様子を見ていると、本当は、賢くなりたいのだと思いました。

子どもたちが賢くなるために、漢字の小テスト(十問テスト)で全員が百点をとれる取り組みをしました。その日に習った新出漢字は、指書き、空書きを何度もしてその場で覚えました。隙間時間に何度も問題を出して空書きをしました。漢字に苦手意識を持っている子は、さよならした後や廊下ですれ違う時などにも問題を出しました。何度も繰り返す中で漢字の小テストは、全員が満点を取れました。毎回ではありませんが、ほぼ全員が満点を取れるようになりました。しかし、五月の一回目の大テスト(五十問テスト)は、非常に悪い結果でした。九十点以上が数人しかいませんでした。

七月の二回目の大テストは、色々な取り組みをして大幅にクラスの平均点(二十点以上)が上がったのですが、三十点未満の子どもたちも数人います。

その後、どんな取り組みをすれば、いいのか考えている中、この本に書かれている漢字カルタをやってみようと思っています。

漢字の定着率を上げるには、漢字に触れる機会を増やすことです。多ければ多いほど、漢字の定着率は上がっていくはずです。子どもたちは、カルタが好きなので楽しく覚えれます。次の大テストの結果が楽しみです。

久保齋著『不滅の一斉授業』を読んで（第2部の感想）

鈴木基久

私は読解力に興味があるので、「教科書の読解記憶・論理の記憶」について書かれている第2部について取り上げようと思う。

2章　学力の要　読解力を育てる

2章の内容は2005年に出版された「一斉授業の復権」にも書かれている。20年前に書かれた文章なのに、今読んでも全くその通りだと思った。特に心に残ったのは、「子どもの立場から考えると、高学年での学習を可能にするだけの読解力をつけられずに進級させられたことになり、低学年、中学年でもっともっと読解力をつける取り組みが強化されなければならない。」の部分である。読解力を育てることの必要性は多くの教員が理解していると思うが、20年たった今でも、状況は改善していないように感じている。なぜ改善できないのかを私達は追求し続けなくてはいけないと思う。私は、学習用語を使い学び方を身に付けられる国語科の授業をすること、不足しがちな初見の文章の読解問題を宿題として取り組ませるようにしている。

しかし、最近では就学前からのスクリーンタイムの増加による本離れ、体験不足によって語彙が不足している子どもたちが増えている。「読解力は学力の要であり、自己教育力の基です。読解の忌避は学習することからの悲しい逃避です。」と久保先生が指摘されているような状況が起きているので、読解力を身に付ける前提となる語彙の習得にもさらに取り組む必要があると感じている。

3章　国語の市販テストで満点を取らせる《逐語的読解指導》

3章の内容は2013年に出版された「授業づくりと学級経営の技88」にも書かれている。

【ウォーリーを探せ】で答えのある文を見つけたら、次は【注文に応じて正しい料理を出す】取り組みを進める。発問に応じて答える訓練が必要で、なるべく早く読解の手ほどきをすると、どの子も市販テストで百点を取るようになると書かれている。

特に共感できたのは、156ページの「答えの文を見つけることができない子に教えることは至難の業です。」の部分だった。「困難な子には、偶然できたときに褒めて快適な情動を与え、辛抱強くこのような取り組みを続けていくしかよい方法ない。」と久保先生が言うほど難しい問題なので、改めて粘り強く継続して取り組んでいくことの大切さを確認できた。まずは、発問に応じて答える訓練をどの学年でもするべきだと思う。

１章　読解力は学力ではない　読解記憶・論理の記憶こそが学力の源泉

１章は苅谷剛彦さんの『コロナ後の教育へ』のことが書かれていることから分かるように、２章３章の内容よりも後になって久保先生が提案した「読解記憶」について書かれている。

私は、学力研の学習会「授業自治ゼミナール」で学んでいたとき、久保先生から「読解記憶」の考えを初めて聞いた。その頃、私は説明文の読解力を高める方法を考えていた。「この文章は何が言いたかったの。」に答えられることが、文章の理解度の指標になると考えた。そこで、この問い対する考えを単元の始めと終わりに書かせたら、何らかの変容が見られるのではないかと考え、２年生の３学期に初めて取り組んだ。単元の学習後に、子どもたちに「この文章は何を言いたかったの。」と質問したところ、Ａ評価８人、Ｂ評価１１人、Ｃ評価４人、Ｄ評価４人だった。（Ｃは大切なことが１つも書けていない。Ｄは無答。）

しっかりと授業をしたにも関わらず学級の３分の１の子どもが答えられないことにショックを受けた。正に「記憶していなければ読解しても役には立たない状態」がこれだと分かった。それ以来、低学年であっても、「この文章は何が言いたかったの。」を問い、ノートに答えを書くだけでなく、覚えるための手立てをとらなくてはいけないと思っている。例えば、友達同士で問題を出し合い答えることを繰り返すことで、集団的に記憶させることができるのではないかと考えている。

４章　逐語的読解から真の読解へ

４章は『不滅の一斉授業』で初めて書かれた久保先生の最新の提案だと私は思っている。特に心に残ったのは、「文章全体を意味・思想としてとらえない限り、何が大事な言葉かどうかは分からないし、段落の要点を連ねてもぎこちない文にしかならない。中学年ではもっと大らかに要約をとらえ、自分の言葉で筆者の言っていることを言い換える取り組みを授業の中で旺盛に行うことが必要です。」の部分である。国語科の学習内容として、要点・要約・要旨はもちろん大切である。しかし久保先生の言うように「子どもたちも教師も、要点・要旨・要約となると構えてしまい固まってしまう。」のもよく分かる。逐語的読解では、答えとなる文を見つけ発問に応じて答えるので、言い換えはしない。一方で、真の読解のためには、「自分の言葉でわかる、感じる」ことが重要なので、自分の言葉で言い換えることが推奨される。単元テストは、ほとんど逐語的読解の問題なので、以前の私は「言い換える」ことに否定的な考えを持っていた。しかし、大らかに要約をとらえるための「この文章は何が言いたかったの。」に自分の言葉、表現で答えることが今は重要だと思っている。

予習展開による授業づくりを実践してみて

大阪　吉田雅直

「不滅の一斉授業」第三部「予習展開による授業づくり　クラスづくり」を読んで、これまで一年生・三年生・五年生で実践してきた国語の物語文における予習課題への取り組みについて改めて振り返ることができたので、まとめてみたいと思います。

久保先生は、はじめに、「解決しておかなければならない問題」として、①「学年が高くなければ予習は無理ではないかという懸念」と②「学力の低位な子には予習は負担が重すぎるのではないかという問題」について述べられています。

低学年こそ予習課題を

まず①については「予習は一年生からできる」という久保先生の言葉を信じて、一年生のはじめての物語文「はなのみち」から予習課題に取り組んでみました。発問は「くまさんはどうして　りすさんに　きにいったのだと　おもいますか」「ふくろに　あながあいていたことに　きづいた　くまさんは　どんなことをかんがえたと　おもいますか」というもので、事前に学級通信で予習課題の意味と方法について保護者の理解を得た上で取り組んだので、音読をしながらお家の人と一緒に取り組んだり、自力では難しい子は放課後の居残り学習で一緒に考えたりしながら、少しずつ自力で予習課題に向き合うことができる力を育てていきました。三学期の「ずうっと、ずっと大すきだよ」の研究授業では、一年間を通して予習課題で鍛えられた深い読みと豊かな交流ができる子どもたちを見ていただき、一年生から取り組める予習課題のよさについて、多くの先生方に伝えることができたと思っています。

このように、予習課題は「低学年でもできる」というよりも、学力格差が大きく、学習意欲が高い低学年でこそ、取り組むべき課題であると確信しています。

予習課題が格差を解消する

また②の「学力の低位な子には予習は負担が重すぎるのではないか」という問題ですが、三年生や五年生での取り組みを通して、むしろ学力の低位な子ほど、予習課題を必要としていることを実感させられました。

学力が高い子は、授業中にいきなり口頭で発問されても、その意味を瞬時に理解し、ぱっと答えを出すことができる瞬発力を持っています。しかし、学力が低い子は、発問の意味を理解するのにも、答えを導き出すのにも、時間がかかります。そして、自信がないので、手を挙げて発表するのにも勇気がいります。そうこうしている間に、瞬発力のある子どもたちだけで授業がどんどん進んでいき、学力の低い子どもたちは一生懸命考えているのにおいてきぼりになり、やがて考えるのをやめ、授業に参加すること自体をあきらめてしまうようになります。

このような授業における格差を解消してくれるのが予習課題なのです。事前に提示される発問を宿題として家でじっくりと考えてくることによって、時間がかかる子も、

自分の考えをしっかりと言語化することができるようになります。それどころか、瞬発力のある子が思いもよらないような深い考えや豊かな発想が次々と湧き上がってきて予習課題の用紙に小さな字でびっしりと書いてくる子も出てきます。そして、これまで一度も手を挙げることができなかった子どもたちが、「早く発表したい」「みんなの意見を聞きたい」と前のめりで授業に参加するようになり、予習課題のない口頭発問による授業では考えられなかったような逆転現象が見られるようになるのです。また、予習課題に取り組むことで意見の多様性が一気に高まり、それが豊かな交流の原動力となり、学力が「高い」と思われていた子どもたちにも気づきを与え、授業の質が高まっていきます。

　このように予習展開による授業は、学力の低位な子の負担になるどころか、そのような子どもたちに安心感を与え、自信を取り戻し、格差を解消し、逆転現象を引き起こし、全員参加の授業を実現することができる、極めて有効な学習形態であると言えます。

予習に取り組めば授業が劇的に変わる

　本書では、予習課題に取り組むメリットとして、子どもたちが変わるというだけでなく、教師が変わり、授業が変わるということについても述べられています。このことについても、実践を通して多くの学びがありました。

　まず、予習課題を子どもたちに提示するためには、少なくとも前日に翌日の授業の中心課題がイメージできている必要があります。つまり、行き当たりばったりの授業はできなくなり、常に一歩先を見通して授業を進めていく習慣ができるのです。この教師の意識の変革が、授業を根本的に変える原動力となっていくのです。私は、次の時間の中心発問を予習課題として設定することが多いので、単元計画も予習課題を考えることから始めるようにしていました。これによって、教材文の内容をだらだらとなぞる芯のない授業ではなく、子どもたちが思考をフル回転させ、多様な意見が出ることが予想される質の高い発問を設定し、それを布石として授業を組み立てていくというワンランク上の教材研究ができるようになっていくのです。

　また、本書でも述べられているように、予習課題のよさは、子どもたちの意見が授業前にわかるということにあります。ベテランの教師は同じ教材を何度も教えているので、子どもたちからどんな意見が出るかだいたい予想がつき、多様な意見を瞬時にさばくことができます。しかし、初めての学年、初めての教材でどんな意見が出るか想像することはかなり困難です。そこで、授業前に予習課題にさっと目を通しておくことで、子どもたちの意見の傾向や、意見交流を豊かにしてくれそうなユニークな意見、みんなの思考を深めてくれそうな意見などを把握することができ、授業の展開をイメージできるようになることで、余裕を持って授業を進めることができるようになっていくのです。

　このように、予習展開による授業づくりは、教師を変え、授業を変え、子どもたちを変える「一石三鳥」の取り組みであると言えます。「凛々しい個別化」と「豊かな交流」という一斉授業の二つの柱を結びつけるのが予習展開であり、「いつでも」「どこでも」「だれにでも」できる取り組みにしていくために、更に実践と研究を続けていきたいと思っています。

久保齋著『不滅の一斉授業』を読んで

大阪　根無　信行

一、はじめに

「一斉授業の復権」が２００５年に発行され、拝読しました。「学力低下・学級崩壊を救うのは一斉授業だ！」という帯がついており、学級づくりや授業がうまくいかない自分にとって、生活指導ではなく授業で学級を変えていくことを伝えられている内容に感銘を受けました。また、学力研夏の全国大会の青年教師の分科会で、私が2学期はじめの授業計画をレポートしたのを久保先生が聞いておられて、「こんな授業してたらみんな学級崩壊してまうで」と言われたことも覚えています。ワークシートの学習では子どもだけでなく教師の授業力も阻害されることや、自分の授業にはなかった〝お客を出さない〟一斉授業の大切さを学んだことがとても大きかったです。それから２０年以上経った今年、「不滅の一斉授業」では、音読、板書・ノート指導、〈学習規律の到達度〉５つのステップも、同じように示されています。当時から、授業は骨格を崩さず中身を深化させるのが授業改善だとして、担任した学級を、時間をかけて一斉授業ができる学級にしていこうとするものでした。現在、タブレットを用いた個別最適化学習や、教師が支援・伴走者としてのみの役割を担う自由進度学習が進められようとしています。それでも一斉授業が変わらず「不滅」であるのは、一斉授業は不易の、「学力をつける」ことのできる手立てだからなのでしょう。

二、学級集団のために担任ができること

『不滅の一斉授業』第一部を中心に感想を伝えたいと思います。第一部には「一斉授業」の核心と、なぜ不易で不滅なのかが書かれていました。（2部・3部で具体的な授業のアイデアが示されています）

まず学校での学級集団は、塾でも家庭教師でもタブレット学習でもなく、学童期の子どもが集団で学習する意義も含んでいるという解説に納得しています。

一斉授業で子どもの学力を伸ばすことができるのに、今一斉授業が「古い」授業形態だとして、校内研の研究内容になってこないのは、子どもを疎外して、孤立させる学習やタブレット使用の推進が背景にあるということがよくわかりました。この違和感は、今の政策による学力観や学習方の押し付けの中、子どもがあたかも願っているかのように偽装されているというものからだと記されていました。子ども発信、現場の教員発信でないために、子どもの発達の観点を全く考慮されていないから、一斉授業ではなく、次々と新しい学習形態が提案されてくるということに納得しました。

『教師は往々にして、なにかに触発されると突然、教えてもらった授業形態がやりたくなって、子どもたちの学習能力や学習規律の到達度を無視して新しいけいたいを授業にもちこみます。これは、子どもにとってはなはだ迷惑なことです。』（p・７６・L６）という文があります。学校現場ではないところで考え出される新しい学習形態は、まさに研究指定や、時期改訂学習指導要領には、教師の性格を分かっているのかいないのか、進めようとするもう一つの側面があって、それに現場が引っ張られていくことにつながる思いです。『授業改善とは、大きな骨格を崩すことなく、その中身を深

化させようとするものだ』と、『一斉授業の復権』にも、『不滅の一斉授業』にも、書かれていました。目の前の子どもを見ている現場の教師だからこそ、気をつけなければいけないと思いました。

三、集団だから伸びる

『一斉授業の本質は、個と集団の双方が位置づけられることです。学習は本来個のものですが、人間は類的存在であると言われるように、集団のなかで多くのことを学んでいきます。個のみの学習では到達できないけれど、集団のなかでなら到達できることが多くあります。一斉授業では、〈凛々しい個別化〉がなされ、個として学ぶことと、集団で議論をするなどの〈ゆたかな交流〉をとおして学ぶことの2つが両立できるのです。』

この20年、家庭的に恵まれない子もおり、そういった対応で、学校に来さえすればいい、給食を食べて疲れたら掃除は寝ていてもいい、授業は一番最後、という学校の姿勢を作り上げてきたのも事実です。学校にきにくい子は、家庭の背景が影響し、現況確認をすること、迎えに行くことに疲弊し、その子が授業に参加できない理由に、授業が何をしているか分からないくらい学力で悩んでいることから目を逸らしがちでした。しかしこの本には、『教師はあくまでも授業で勝負、学校は学習するところであるという大原則を踏まえることが肝要です。』（p・51）とあります。学校に来さえすればいい、だけでなく、学校に学習に来させたい、という思いで向き合いたいと思いました。なぜなら、集団だからこそ伸ばすことのできる手立てが学校にはあるからです。

四、タブレット学習の弊害

一部第5章の〝教師権能の復権〟では、所見の担任以外に手直しをされる「不愉快さ」について書かれていました。（権能という考え方を知ったのも初めてでした。）

昨年より、学校にもAIの使用が公式に導入され、子どもの通知表における所見が、教頭にAIによって手直しされ返ってきました。教頭先生は親切のつもりで、「AIだから参考に」と柔らかく伝えてくれましたが、せっかくなのでそのように一部を書き変えました。そしてそれを校長に再提出すると、同じ場所が訂正されて返って来ました。

教頭先生も校長先生も悪気はなく丁寧に仕事をしてくれていることに変わりはないのですが、不愉快とはこのことだと大変共感しました。二度とAIは挟むまい、と決めた日になりました。

次期学習指導要領もそうですが、デジタル学習指導要領の導入で、指導案の作成がなされたり、全教科を貫く探究という「形」の指示による教師の自由度が奪われてしまったりしないようにすることにもつながると思いました。

五、おわりに

一部第4章を中心に、「愛」について書かれているのを読みました。そして、本全体を通して語られている「愛」についても伝わってきました。授業も、評価も、「愛」なのだと。

愛はそれだけでは存在できない、一人では成り立たない、また、機械相手でも、さらに間に機械が介在しても、成り立たなくなるのが、学校での「愛」の形なのだと納得しています。集団で授業をつくり出す学校だからこそ、一人では成り立たないはずの「愛」が生まれるのでしょうね。

「言い換える力」を育てる

春日井学力研　山口左知男

待望の久保先生の新刊が「やっと」（いや「ついに」か）出ました。すぐ読むと約束しながら、原稿依頼を受け慌てて読み切りました。久保先生、ごめんなさい。多々学んだ『一斉授業の復権』から二〇年。ズシリと重い一冊でした。

前書きにありました。久保先生の話は「何か哲学のようなものがあって、話を聞くと私もがんばろうという気になる」。私もその一人です。話の大筋よりも、ぽろっと出てくる枝葉の部分に哲学臭さが表れ、そこに本質を感じることがよくありました。だから、同じテーマであっても、大阪まで奈良まで京都まで足を運びました。春日井にも何度も来ていただきました。

久保先生の話はライブです。一度として同じ話がない（いや、できないのだとも思いますが、失礼）今回の著作も、今まで書かれた集大成ですが、やはりそうした新鮮味がプンプンする内容になっています。ウキウキした気分で読みました。

私は、読解力の部分を中心に感じたことを書かせていただきます。

久保先生はこう書かれています。「小学校で最大の課題を一言で言うならば、『文から情報を得、自分の思いを文で表すことのできる子に育てること』だと。これは、既に２０年前『一斉授業の復権』の中で明らかにされてきたことです。同感です。この活動が脳を鍛えています。今回の『不滅』では『一斉』で語られた読解力指導がさらに実践的・理論的に進められています。そして、読解力指導が学力づくりの核であることが一層明確になっています。以下この点に関わって、特に印象に残った点を取り上げます。

第一に、少しずつ表現を替えながら、読解力の原点・定義を明快に位置づけられている点です。「問い返し、読み直す力」「自分の言葉でわかる、感じること」「言い換える力」。ついこの間、お母さん方の会に呼ばれ、脳の話をしたばかりだったので、とてもビビットな思いで読みました。無論脳の話など私は門外漢ですから、言語脳科学者の酒井邦嘉先生の著作から学んだことをまるっと受け売りと自分勝手な解釈でお話したのですが、そこで明示されていた人間が物事を理解する仕組み（言語の処理過程）の図と久保先生の話が重なっているような感覚をもちました。入力から理解・構造化・記憶の過程、それに支えられた表現・創造出力の過程が、実践的にまとめられていると思いました。自分の言葉で分かり言い換える過程が脳の言語活動の本質です。

第二に、読解記憶の概念とその具体化についてです。初めて読解記憶という言葉を聞いたとき、素直に「なんじゃ、それは！」と思いました。しかし、本書を拝読する中で、これは記憶という行為の本質にあたることだと理解しました。記憶ということは、記憶単独で起こるものではない。記憶の多くの部分は、論理のある記憶で成り立っている。いろんな文脈の中で起こって、いろ

んな過程の中で定着するもので、論理の中で定着していくものだということが実践的に明確になっています。「読解記憶という概念は、読解したこと、学習したことのすべてを記憶の対象として子どもたちに集団的記憶させ、学力の原資にしていこうという考え方」です。読解力の源泉、「言い換える」ことの中で起こること、それを二段階の実践で体現化しています。「再話・口頭試問」と「文章化」。書かせる前に日常的にうんと問い語らせる、そうすることで子どもたちが読解し自分の言葉で発信する力をつけていくこと。次に、言語化、文章化の壁を乗り越えるため、「注文に応じて書かせる」という行為を日常化すること。自分の言葉で言い換え話す、そして書くということを「日常化」することこそ、読解記憶のカギであり、読解力向上のカギと言えるでしょう。

　第三に、逐語的読解から真の読解への道筋が明確になっていることです。そして、さらにはっきりと逐語的読解を読解力のふりかえり学習、基礎基本と位置付けている点です。逐語的読解、久保先生の話の中で何十回いや何百回(?)と聞いたこの言葉。読解力の話をしてほしいとお願いしたのに、最後までこの話で終わったこともありました。今回ヴィゴツキーの言葉を引用し、「文の束」としてとらえるか、意味・思想としてとらえるかとの違いとして逐語的読解と真の読解の段階的差異をおさえたこと、ウォーリーの話と注文にこたえる話をさかのぼり学習に位置づけ、真の読解への発展過程として明らかにしたことも重要だと思います。

　もう一つ、久保先生は、この読解力のふりかえり指導である逐語的読解指導の中で、読解力の低い学びから逃げようとしている子の再学習の中で、彼らが「問い返し」「読み返し」ができる子に育つための重視すべき点を押さえています。「簡単な文章から」「簡単な問題を出し」「やさしく問いかける」、そして「何度も何度も正解させてやる」こと。逐語的読解がそれにとどまらず、真の読解に高まっていく主体的条件です。学力づくりの根幹ですが、最も大事にしなければならないことと再認識しました。

　第四に、読解記憶を一斉授業の中で行う意義です。授業時間内でいかに集団的に記憶させていくか。久保先生のすごいと思うところは、この一時間の授業での可能性をとことん追求しているところです。すべて一時間の授業で完結させるところ。この欲張りなところです。「教科書の読解記憶が子どもたちの学力を格差なく伸ばす」という確信のもとに、「集団読解、集団学習の成果がすべての子どもたちの脳に結実する授業システム、教育システムの構築」を今後の課題とされています。私は、　現職は退きましたが、プログラムづくりなら、サークルの仲間たちとともに、まだ何がしかの論議に参加できそうにも思います。がんばります。

　私は、夏のフォーラムの新井紀子先生が言われた言葉が忘れません。「読めない子を読めるようにするのが学校です。格差をなくすのが学校です。」同じことを急激な学力低下の中でデジタルから手書き、紙への回帰をかじ取りしているノルウェーのストーレ首相も言っています。「学校で最も重要なことは、子どもたちが読み書きや算数を学ぶことだ。」久保先生の力作はこの課題に応えるものとなっていると確信します。

『不滅の一斉指導』からの学びを、どう生かすか

春日井学力研　堀井　克也

◎　そうだそうだ！でも、どうすれば…

第一部五章「教師権能の復権」の以下の文章を読んで思わず膝を叩きました。

「担任である教師が子ども達に創意工夫した教育がしづらい、思ったような教育ができない。参観日にやりたい授業を選べない。使いやすい教材が選べない。通知表の所見に手直しを指示された。これらの「不愉快さ、もやもや感の根源はただ一つ、教師権能への不当な介入である」という認識に、すべての教師が気づき、教師の権能とは何かを考え、不当な介入にはみんなで戦い、教師同士、お互いの教師の権能を守り合い、復権し、拡大するような取り組みを進めない限り、教育現場はいつまでも住みづらい、不愉快な場になってしまいます。こんな悪しき傾向を増殖させれば日本の教育は死んでしまうのです。」

久保先生は以前も「疎外」という言葉を使って、教育の主体であるはずの教師の権能が不当に傷つけられ、軽視され続けている現状に警鐘を鳴らしておられました。現場の教師として、確かにそうだよな…と感じることばかりです。けれど、こうして改めて言われなければ「そういうもの」として諦めてしまっていたかもしれないことに気付きました。そして、多くの、特に若い先生方は、「そういうもの」に対して疑問をもつことさえ無いのではないかと気付き、慄然としました。フィンランドやデンマークなどの北欧諸国では「教師は高度な専門職」と社会的に認識されていて、大きな裁量権が現場の教師に委ねられているとも聞きます。すごくうらやましく思えます。

しかし…どうしたら良いのでしょうか。何から始めるか、悩みは尽きません。

◎　「愛すること」を教える

私自身は出世する気はさらさらなく、あくまで一教員として生きていくつもりですので、その立場でできることを考えなければなりません。となるとやはり、まずは圧倒的な実績を積み上げて、職場における発言力を高めていくしかないと考えます。

先日、担任している六年生のクラスで『やまなし』の授業を公開しました。校長、主幹をはじめ多数の同僚が参観してくれましたが、授業後に参観者が口をそろえて褒めてくれたのが「全員が授業に参加しているのがわかる」「しっかり予習して授業に参加しているのがすごいし、それが授業にしっかり反映されている」「みんなが発言している人の方をちゃんと見ているし、発言できない子もよく聞いて思考しているのが伝わってくる」「発言に対するリアクションがあって、温かい雰囲気が心地よい」などの、子ども達の学びへ向かう姿勢でした。これを受けて、なぜ私の学級の子ども達がそんな素敵な姿を見せてくれるように成長したのかを考えると、第一部第四章「愛すること」を教える授業づくり　クラスづくり」に久保先生が書かれていることがカギになっているように思えてならないのでした。

「社会心理学者のエーリッヒ・フロムは、「小学生の時期に、子どもは愛される自分だけでなく、人を愛するという萌芽をもつ」と述べています。学力づくり、授業づくり、学級づくりの中で、愛することを教えることこそ、現代日本の小学校教師にとって、最も大切な課題であり、営みではないでしょうか。

子どもを愛し、子どもに愛させる、キラキラ輝く教室愛に満ちたクラスづくり、授業づくりをめざしましょう。」

小学校高学年という時期は、体だけでなく心も「子ども」から「大人」へと近付いていく時期です。ですので、私は高学年を担任すると、「子どもから大人へ」という話を様々な角度から伝えていくようにしています。そして「大人」へと近付いていくように促し続けているのです。

しかし、生まれてこのかた「愛されること」ばかりで「愛すること」を教わってこなかった子ども達は、教師や友達から「与えてもらうこと」ばかりに注意を向けてしまい、期待通りに何かが与えられなかった時に傷ついてしまいます。友達関係のトラブルの多くは、こうした観点で整理すると捉えやすくなります。もっと愛してほしい、無条件に理解してほしい…けれど、そんな願いは、叶いません。愛を求め続ける限り、ずっと不幸であり続けることになります。ですから、愛されることを求めるのではなく、愛することを教えることが大切です。

そして次に、この「愛すること」＝「与えること」の中身を具体的に教えて、実践を促すことが重要になってきます。

授業に関連付けて伝えるとすると、例えば予習に取り組むこともその一つになります。次の授業に向けてあなたが一生懸命予習に取り組めば、きっと授業の中でよい意見を出すことができるだろう…そしてそれは、共に学ぶ仲間の助けになるにちがいない。だからこそ予習をがんばる意義があるのだ…そんな話をしていきます。

また、授業中に仲間の発言の聞き方によっても「与えること」ができるということも伝えていきます。せっかく発言しても、周りから何のリアクションも返ってこなければ、発言者は傷つき「もう二度と発言なんかしない！」と思うことだろう…けれど、あなたが「なるほどね」「いいね！」「いや、それはちがうんじゃないかな…」などとリアクションを返せば、どれだけ発言者を勇気づけることになるかわからない…そんな話を、くり返し伝えていきます。

そのような指導の結果の一端が、公開した『やまなし』の授業で見られたということです。こうして目に見える形で実績を示し、発言力を高めていくというのが、遠回りのようで確実な道かなと考えています。

◎　今、取り組んでいること…読解記憶

最後に、まだ出来ていないことについても書いておきます。第二部で紹介されている「読解記憶・論理の記憶」という課題については、これまで自分はほとんど意識したことがありませんでした。知識がなければ思考もできないと理解していたのに、その大切な知識を記憶する営みは、全くの子ども任せになっていました。

こちらは今後の課題として捉え、現在国語と社会の学習で実践に取り組んでいるところです。新たな視点を得て、自分の実践がどう進化していくのか、楽しみです。またの機会に報告させていただきます。

＝「不滅の一斉授業」久保齋著を読んで＝

ハウツーではなく本質を

いろえんぴつ　岸本　ひとみ

重いかな？？

けっこうな厚さと、重さ、そして、中味は文字ばっかりなので、ライトノベルに慣れた若い先生には、受け入れられるかどうか少々心配な本が完成しました。久保さんの、渾身の著作です。内容は、一気読みしました。著者の熱と、子どもたちへの「愛」があふれた本でした。

困って立ちすくんでいる人にこそ

秋になると、学級づくりや授業づくりに悩む先生が増えてきます。１学期には、それほど見えなかった自分のクラスのできていなかったところが、顕著に見えてきて、いろいろよくない現象が目につくようになってきます。

逆に、うまくいっているクラスでは、好循環が生まれていて、子どもたちの成長ぶりが伝わってきています。職員室で、好循環の話を聞くたびに、自分のクラスとくらべて落ち込んでしまうこともよくあることです。この本は、そんな先生にぜひ手に取ってもらいたい本です。

もし、今、自分のクラスがうまくいっていなかったら、その原因は何なのかを考えるための手引書になります。１学期の授業づくりのスタート時点で、つまずいたのかもしれない、とふりかえることができると思います。長い教師人生、一度や二度は修羅場があるもの。問題はその経験を分析して、その後の実践に生かすことができるかどうかにかかっていると思います。

今、立ちすくんでいる先生、老若男女を問わず、自分の実践を客観的、かつ冷静に分析するために、この本を手元に置いて下さい。今年はうまくいかなくても、来年４月からのスタートに間に合えばそれでＯＫですから。

個別最適化、自由進度学習でいいのか

もし、あなたの学校が、個別最適化だからとか、自由進度学習だから、とかという方針のもと、１時間の授業の中で、子どもたちの交流の時間が保障されていない状態なら、ぜひ、この本を読んで、理論を身につけて、研究担当や管理職に対案を示して下さい。

ヴィゴツキーの名前を知らない研究担当や管理職は、いないでしょう。この本の第一章に、**「ヴィゴツキー理論と一斉授業の親和性」**というページがあります。この内容を示して、もう一度、学校全体で授業の組み立て方を見つめ直してもらいたい、と提案すればいいのです。

管理職や研究担当の年齢であれば、一斉授業の腕もかなりのものだと思います。その人たちは、今、巷で流行っている「個別最適化」や「自由進度学習」に対して、疑問を持っている人も多いはずです。その疑問に依拠して、修正を求めればいいのです。

職員室では話してもらえない

最近は、職員室で子どもの話が始まるのは、勤務時間がとっくに過ぎた時間帯で、子育て中の先生たちにとっては、そんな話に参加するのが難しい状況になってきています。みんな、ノートＰＣをにらんで、提出書類を作成したり、生活指導上の問題について、打ち合わせをしたり、ケース会議があったりで、隣の担任の先生と、ろくに話もしないまま一日が過ぎていく、ということもままあります。

この本には、日本の教師の持っている、優れた技術「一斉授業」のすばらしさが詰まっているのです。ベテランの先生たちから話を聞くことができないのであれば、ぜひ読んで下さい。あなたの隣にいるベテランの先生は、もしかしたら、個別最適化の中に、ちゃんと一斉授業のポイントを加えて授業をしているかもしれません。そのコツやツボを、あなたに伝えることができなくて、もどかしい思いをされているかもしれないのです。

職員室での授業実践の話が展開されるネタにしてもいいと思うのです。

「先生～、こんな本を読んだんですけど、『子どもを愛する』って、どういうことなんでしょうね。」

なんて、問われると、お隣のベテランの先生は、待ってました、とばかりに、いろいろ語ってくれるはずです。



一斉授業は、日本の教師が大切にしてきた歴史と伝統あるものです。うがった見方かもしれませんが、日本の教師がみんな香り高い「一斉授業」をめざし始めたら、子どもたちの学力はぐんと伸びていくことが予想されます。そうなると困るので、あえて、わざと、それをさせないように他の授業方法を導入して、子どもと先生を疲弊させ、公立学校を崩壊させようとしているのではないかと、疑ってしまいます。

何より「愛」がある

他のハウツー本との大きな違いは、著者が子どもだけでなく、苦労しながら子どもたちと真摯に向き合っている、日本中の先生方に対する「温かいまなざし」です。実践だけではなく、子どもたちが社会に出ていくのに困らないためには、どう育てればいいのか、一番身近にいる大人として、教師はどう接すればいいのか、をちゃんと伝えてくれます。

久保さんは、人間がとっても好き。大人も子どもも。そんな人が書いた本ですから、その「愛」が伝わってきます。読んでいてほっこりするのは、たぶんそれを感じられるからでしょう。

一冊２８６０円。手元に置いておけば、その値段の元は十分にとれる本です。読書の秋に、職員室でどうぞ。

「どの子も伸ばす」を本気で考える連載　92

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長　岡本　美穂

二十周年記念特別講座「先生のための学校」を無事に終えることができました。全国各地からご参加いただいた先生方、そして開催にあたりご尽力くださった皆様に心より感謝申し上げます。

今回の講座では、特別講師として赤坂真二先生をお迎えしました。運動会シーズンの大変忙しい時期にもかかわらず、多くの先生方にご参加いただき、改めて教師が学び続けることへの熱い思いを感じる一日となりました。

赤坂先生にご登壇をお願いする際、私は一通のメールを送りました。

「先生のための学校」は、久保齋先生が二十年間続けてこられた研修会です。二十年という時間は決して短くありません。その間、多くの教師が悩み、迷い、立ち止まりながらも、再び前を向く力を得てきました。

久保先生が大切にしてこられた信念があります。それは、「教師を孤立させないこと」、そして「教師を支えることで、子どもを支えること」です。授業の型を学び、授業を安定させること。教師が自信を取り戻すこと。悩みを抱えた教師が再び立ち上がること。そのための場として「先生のための学校」は続いてきました。

また、長年ともに歩み続けてこられた宮川佳代子先生は、七十七歳を超えた今もなお一年生の担任として教壇に立たれています。その姿は、まさに教師を支える教育そのものだと感じています。

私は、赤坂先生が追究されている「子ども理解」「学級経営」「教師同士の関係づくり」が、この二十年間「先生のための学校」が大切にしてきた理念と深く重なると思いました。そして、この節目となる講座をお願いできるのは赤坂先生しかいないと考えたのです。

講座終了後、赤坂先生から温かいメッセージをいただきました。その中で特に印象に残ったのは、「一斉授業の価値の再確認」という視点です。

近年、協同学習やICT活用、個別最適な学びなどが注目されています。しかし久保先生が長年伝えてこられたのは、それらを否定するのではなく、まず授業の骨格をしっかり身に付けることの大切さでした。

発問、指示、説明、板書、机間指導。

教師としての基本技術を磨き続けることが、子どもたちの学びを支える土台となります。その上に新しい教育実践が積み重なっていくのだという骨太なメッセージが、会場全体に響いていました。また、教育実践への励ましについても触れてくださいました。私自身、教師になってから二十年間、多くの先生方との出会いの中で学んできました。一人で成長してきたわけではありません。先輩教師に支えられ、仲間に励まされ、子どもたちに教えられながら歩んできました。

赤坂先生は、そのような学び続ける教師の姿が講座全体から伝わっていたと話してくださいました。さらに強く感じたのは、教師同士のつながりの大切さです。

教育の仕事は、ともすれば孤独になりがちです。学級のこと、授業のこと、保護者対応のこと。悩みを一人で抱え込み、自分を責めてしまうこともあります。しかし、「先生のための学校」には仲間がいます。話を

聞いてくれる人がいます。一緒に考えてくれる人がいます。

今回も講演後の交流や相談会では、多くの先生方が熱心に語り合う姿が見られました。初めて参加された先生が先輩教師に授業の悩みを相談する姿、久しぶりに再会した仲間同士が近況を語り合う姿、地域や校種を越えて教育を語り合う姿がありました。その光景こそが、この会が二十年間大切にしてきたものなのだと思います。

そしてもう一つ、赤坂先生が高く評価してくださったのが、日常実践を大切にする姿勢です。

華やかな実践や特別な取り組みだけではなく、毎日の授業を丁寧に積み重ねること。子どもの小さな変化を見逃さず、授業を振り返りながら改善を重ねること。そのような地に足のついた実践の価値を改めて確認することができました。

学力研が目指してきたのも、そのような教育です。

・子どもが主役であること。
・教師が学び続けること。
・教師同士が支え合うこと。

学力研は、単に授業技術を学ぶ場ではありません。教師としてどう生きるのか、子どもたちとどう向き合うのかを問い続ける場でもあります。目の前の子どもが分かったと笑顔になること、仲間の実践から勇気をもらうこと、自分の授業を振り返りながら一歩前に進むこと。その積み重ねが、子どもたちの成長につながると信じて活動を続けてきました。

教師という仕事は、日々子どもたちの前に立ちながらも、自分の実践が本当にこれでよいのだろうかと迷うことがあります。だからこそ、同じ志をもつ仲間との出会いは大きな力になります。

「自分だけが悩んでいるのではない」
「もう少し頑張ってみよう」

そう思える場の存在が、教師を支えるのだと改めて感じました。

振り返れば、この二十年間の「先生のための学校」も、そのような教師同士のつながりを生み出し続けてきました。授業づくりを学ぶ場であると同時に、人と人とを結ぶ場でもありました。一人で抱え込まず、ともに学び、ともに成長する。そんな文化が脈々と受け継がれてきたことこそ、この会の大きな財産なのだと思います。

教育を取り巻く環境は大きく変化しています。ICT の活用や多様な学び方が求められる時代になりました。しかし、どのような時代になっても、子どもを理解しようとする教師のまなざしや、よりよい授業をつくろうとする情熱、そして仲間と支え合いながら学び続ける姿勢の価値は変わりません。今回の講座は、その原点を改めて確かめる機会となりました。

二十年間、多くの先生方がこの会に参加し、学び、それぞれの学校へ戻っていきました。その学びは一人の教師の中だけに留まるものではありません。一人の教師の変化は一つの学級を変え、一つの学級の変化は学校全体の雰囲気を変えます。そして、その先には子どもたちの笑顔と成長があります。

だからこそ、「教師を支えることは子どもを支えること」という久保先生の言葉には大きな意味があります。

二十周年はゴールではありません。むしろ新しいスタートです。これまで受け継がれてきた思いを大切にしながら、これからも教師を支え、子どもたちの成長につながる学びの場をつくり続けていきたいと思います。

ご参加いただいた皆様、そして二十年間「先生のための学校」を支え続けてくださったすべての方々に、心より感謝申し上げます。

考える力をつけるための授業の組み立て方㊴

集団のなかでなら到達できること

大阪教育サークルはやし　荒井　賢一

集団のなかでなら到達できること

久保齋氏が『不滅の一斉授業』（2026. 12 東洋館出版）の中で次のように書いている。

一斉授業の本質は、個と集団の双方が位置づけられることです。学習は本来個のものですが、人間は類的存在であると言われるように、集団のなかで多くのことを学んでいきます。個のみの学習では到達できないけれど、集団のなかでなら到達できることが多くあります。一斉授業では、《凛々しい個別化》がなされ、個として学ぶことと、集団で議論をするなどの《ゆたかな交流》をとおして学ぶことの２つが両立できるのです。

「個のみの学習では到達できないけれど、集団のなかでなら到達できること」を授業の中で生み出していきたい。

昆虫が絶滅したら困ること

三年理科「こん虫のかんさつ」の発展問題として、「こん虫がぜつめつしたらこまること」を考えさせた。（すでにテストは終わっている。）

実は、この問いを出したのは、テスト返しをしたかったからである。

テストを返し、間違いがあった子には、赤で間違い直しをさせる。当然、それなりの時間がかかる。その空白時間を埋めるため、右のような課題を出して書かせておくわけである。

間違い直しが終わった段階で、六個以上書けている子からノートを持ってこさせ、私が書くものを指定して板書させていった。その後、五個以上、四個以上、まだ持ってきてない子と、持ってくる基準を下げていく。二回目に持ってくる場合は、12 個以上、三回目に持ってくる子は 24 個以上としている。倍々と持ってくる基準を増やすわけだ。

板書されたものを紹介する。

①ちきゅうにいるものが少なくなる。
②森がなくなる。　③田がなくなる。
④虫とりができなくなる。
⑤森があらされる。　⑥いんせきがおちる。
⑦むしを買いたい人がかえない。
⑧さかながたべれなくなる。
⑨死体が多くなる。
⑩肉がないときん肉がつかないから。
⑪ちっちゃい虫がきらいな人がいるけどクモが食べてくれる。
⑫いのちがなくなる。　⑬山が少なくなる。
⑭植物がかれる。　⑮うんこだらけになる。
⑯世界がきたなくなる。
⑰ふくがつくれなくなる。

⑱こん虫をまねしたロボットがかいはつできなくなる。　⑲お肉しか食べれない。
⑳川がにごる。　㉑虫を食べる動物が死ぬ。
㉒こん虫はしぜんともかんけいしているので、しぜんが悪くなることがある。
㉓水がきれいじゃなくなる。
㉔やさいのえいようがなくなる。
㉕ちきゅうにいる生き物がめつぼうするおそれがある。　㉖ハチミツがなくなる。
㉗虫好きが困る。
㉘土がふわふわじゃなくなる。
㉙どう物のふんがたまる。

問いに対応してないものがあるが、色々と出るものだ。

「質問がありますか。」

と問えば、その質問にそれなりに答えていった。答えられないものは、私の方で適当にこじつけて答えた。

例えば、「いんせきがおちる」のはなぜかについては、地球には大気があってそれがなくなると隕石がいっぱい落ちてくる、みたいな話をした。

今の段階では、反対意見は出させない。問いに対して、とにかく、自分の考えを持てることを大事にしている。

発表と質問の後に、篠原菊紀・監修『考える力がぐんぐん伸びる！ 科学のおんどく』(2024 6 リベラル社) の「もしもこん虫が絶めつしてしまったら?」を読み聞かせをして、授業を終了する。

カブトムシやチョウやミツバチなど、わたしたちの身の回りにはたくさんのこん虫がいます。もしもこん虫が絶めつしてしまったら、どうなるのでしょう?

リンゴやミカンなどのくだものや、ナスやトマトといった野さいは、花がさいたあと、ミツバチやマルハナバチなどのこん虫が次つぎに花をおとずれることで、めしべに花粉がつく「受粉」がおこり、実がなります。受粉ができなければ、くだものや野さいを食べられなくなってしまいます。

放牧されているウシやヒツジのフンは、ハエやフンコロガシによって、分解されてなくなっていきます。こん虫がいないと、放牧地はあっという間にフンで埋まり、草が育たなくなってしまいます。

小さな鳥や動物には、ハエやバッタなどのこん虫をえさにしているものも多いですね。ツバメのヒナが成鳥になるまでには約20 万びきのこん虫を必要とするそうです。こん虫というえさがなくなったら、鳥や動物はいきていけなくなり、小さな鳥や動物をえさにしている動物もえさがなくなることになります。こん虫が絶めつすれば、こん虫を食べる鳥や動物も、次つぎに絶めつしてしまいます。野菜やくだもの、動物がいなくなれば、わたしたち人間も生きていけません。きらわれることも多いこん虫ですが、とても大切な存在なのです。

「個のみの学習では到達できないけれど、集団のなかでなら到達できること」の授業をこれからもやっていきたい。

教科書「を」と「で」で教え・学ぶ　社会歴史授業　八

「一語の奥にある社会にこだわる」

学力研常任委員　深沢　英雄

一、「許す」ってどういう意味ですか？

先日、社会実践研究会で一緒に学んでいる堀井先生から、信長の授業についての連絡を受けました。

「教科書に、信長がキリスト教を『許す』と書いてあったのですが、その『許す』という言葉が気になった子がいました。どうも言葉の意味がよく分からなかったようです」

このメールを読んで、最初は、単なる言葉の意味の問題のように思えました。「許す」とは、「してもよいと認めること」と説明すれば済むことです。国語辞典で示される「許す」の代表的な意味①相手の希望や行為を認める・許可する（外出を許す）②過ちや失敗を責めない（友だちを許す）③義務や負担を免除する（支払いを許す）です。子どもたちの日常生活の中では、「けんかしたけど、ゆるしたるわ」というのは、過ちを責めない意味になります。

しかし、「許す」という言葉を教材研究の観点でとらえると、この一語の奥に、信長の政治の本質につながる重要な問題があることに気づきました。「キリスト教を保護し、キリスト教の学校や教会堂を建てることを許しました」（教科書７ページ）。なぜ信長は決めることができたのか。

子どもの「許すってどういう意味？」という問いを、このような歴史的な問いへと発展させられないだろうかと考えたのです。

久保先生は『不滅の一斉授業』の第七章で「社会科、理科の教科書で読解記憶を高める」の中で、社会科の教科書を「図や資料の入ったすばらしい説明文教材」と捉えています。また、国語科だけで読解力を育てるのではなく、社会科でも教科書を深く読み解くことの大切さを述べています。

私は、この指摘を今回の「許す」という言葉と結びつけて考えました。社会科で教科書を深く読むとは、単に言葉や文章の意味を正確に理解することではありません。その言葉の背後にある社会の仕組み、人々の関係、歴史の変化を読み解いていくことではないでしょうか。

教科書には、信長が「当時強い力をもっていた仏教勢力を武力で従わせました」とあります。その一方で、キリスト教を保護し、安土には学校、京都には教会堂を建てることを許したと書かれています。この二つの記述を並べて、子どもたちに問います。

「信長は仏教勢力には武力を使ったのに、なぜキリスト教には学校や教会堂を建てることを認めたのだろう」

「仏教が嫌いだったから」「キリスト教が好きだったから」「外国と貿易したかったから」など、さまざまな予想が出るでしょう。

そこで、「では、信長は仏教のお寺を全部なくしたのだろうか」と問い返します。実際には、信長は敵対した仏教勢力とは戦いましたが、すべての寺社を弾圧したわけ

ではありません。保護した寺社もありました。そうした事実を知ると、子どもたちは、単に宗教の好き嫌いでは説明できないことに気づくでしょう。

ここで、最初の「許す」という言葉に戻ります。

「信長は、なぜ教会堂を建ててもよいと認める立場にあったのだろう」

信長は、武力によって領地を広げるだけでなく、その地域のさまざまな勢力との関係を変え、自分の政治的な力を及ぼそうとしていました。このことは、単元の中心発問である「信長はどうやって『ばらばら』の日本をまとめようとしたのだろう」にもつながります。

久保先生は、教科書の文章をそのまま覚えることにとどまらず、子どもたちの読みから問いを生み、教科書を読み直して考えを深めることを重視しています。今回も、教科書の一語から生まれた疑問を、もう一度教科書の記述に戻し、比較し、考え直す学習に発展させたいと思いました。ただし、教科書のすべての言葉にこだわり、細かく読解させればよいわけではありません。社会科には社会科として学ばせたい内容があります。教科書の一語にこだわるのではなく、その一語の奥にある社会にこだわることが大切なのです。

そのためには、教師自身の深い教材研究が欠かせません。社会科とは何か、歴史を学ぶとはどういうことか、戦国時代をどう捉えるか、単元全体で何を教えるか、本時の教科書の記述や資料にどのような意味があるか。さらに、目の前の子どもが何につまずき、何を考え始めているのかを理解することも必要です。

教師は、ともすると自分の知っていることを何でも教えたくなります。しかし、深く知っているからこそ、何を教え、何を教えないかを判断できるのではないでしょうか。

私は、教師の仕事は造園家に似ていると思います。造園家は木の特性や成長を深く理解しているからこそ、切ってもよい枝と、伸ばしていくべき枝を見極めることができます。教師も同じです。子どものどの疑問を伸ばし、どの疑問はいったんとどめるかを判断しなければなりません。

しかも、授業は生きたドラマです。子どもは教師の予想どおりには考えません。思いがけない発言から授業が大きく広がることもあります。教師は授業の見通しをもちながら、その場で子どもの思考を読み取り、瞬時に判断する必要があります。

今回の「許す」という一語も、最初は一人の子どもの小さなつまずきでした。しかし、その疑問を大切にすることで、信長の政治の本質に迫る学習へと発展させられる可能性が見えてきました。

教師の教材研究は深く、子どもへの提示はシンプルに。

子どもの「分からない」を、教師の説明で終わらせるのではなく、「もっと分かりたい」「自分で考えたい」という問いに育てていく。そのために教師は、教科書を深く読み、歴史を深く学び、子どもの思考を丁寧に見取る必要があります。

一人の子どもの素朴な疑問から、学級全体で社会の仕組みや歴史の変化を考える。そこに、社会科における深い読解の面白さがあるのではないでしょうか。

学力研　第20期 先生のための学校・一回目　報告

荒井 賢一（大阪教育サークルはやし代表）

学力研・先生のための学校は、今年度で20期を迎えました。

10月17日の第一回では、特別記念講師として、上越教育大学の赤坂真二先生をお迎えして講演をしていただきました。

57名の先生方が参加されました。

【講演1　岡本美穂

「先生のための学校で学んできたこと」】

卒業までの後94日をどうしていくかを六年の子たちとともに考えている。

国語授業とクラス会議で、言語活動を大切にしている。「学校に行きたくない妹の説得の工夫を考えてほしい」や「自分の片付けられない机の上をどうしたらいいか」のような議題をクラスみんなで考える。

《二〇〇六年：教師一年目の出会い》

犬山の教育改革が語られる中、「庶民の子にこそ、最高の教育、最高の授業を保障しよう」と久保先生が提言。発問・板書・ノート指導が基本だと知る。教師の仕事とは、目の前の子どもたちをキラキラさせること。

《第1期・先生のための学校：追実践に挑む》

目の前にいる子どもをどうするかを追実践してきた。（この時、久保先生が板書をほめてくれた。）

《金閣小学校の久保学級3年生を参観》

子どもらしい。でもすごく発表し、つながっていた。

《現在の取り組み》

みんなで読み、みんなで考え、みんなで学ぶ、教科書の言葉を根拠に考え、豊かな交流を通して、意見をみんなのものにしていく。

《参加者の感想より》

・先生の努力と情熱を感じ、自分が学び直す必要性をつよく感じました。

・目の前の子どもとどうするかを考えること、これは絶対に忘れてはいけないことだと思います。一斉授業で子どもたちが、考え追究していく流れはとても考えが深まるなと感じました。

・先生のための学校の第1期生として誠実に取り組んでこられた岡本先生の姿に感動しました。とてもきらきら輝いている子どもたちの様子がすべてを物語っていると思います。先生から今日もたくさんの元気をいただきました。ありがとうございました。

・岡本先生がされている、「子どもと作る一斉授業」や「豊かな交流」を、より深く学び、自らの授業づくりに生かしていきたいです。“「理想の姿」と現実を比べてどう評価するかでなく、どう作っていくか”が大切というお話もとても印象に残りました。

・しんどさを感じるときに「この子たちだから」と思ってしまうことがありましたが、そこでねばってその子たちに向き合う、それがとても大事だと感じました。また、子どもたちとどこへ向かっていきたいのか、そのために子どもたちとどう作っていくのか、考えて、子どもらしさや学ぶ楽しさのあふれるクラスを作っていきたいと思いました。

・授業技術、指導スキルを磨くことではなく、教師の心を磨くというマインドを感じました。

【講演2　久保齋「不滅の一斉授業」】

PowerPoint と違って板書を使っての授業は、リアルタイム感があるので、子どもを賢くすることができる。

プリント配って授業するクラスは崩れて

いく。
次にどう展開するか分からないリアル感に、ドラマがある。（それゆえ、子どもは先生に集中する。）すでに準備出来ているものには、ドキドキしない。
国はデジタル化を推進しているが、生の人間である教師が、子どもの意見を取り入れながら授業をすることが大切。
ヴィゴツキーの「模範と共同」とは、模範を示して真似させること、凛々しい個別化と豊かな交流が必要。
個別最適な教えは無理。（それは家庭教師がすること）
クラス最適な授業をめざすこと。まずは教師が自分のやり方を貫徹。自分の自信がある教育システムで教える。
自分で問題作りさせることが、自治の萌芽へとなっていく。
一番大事なのは、学力をつけること。現状は、学力をつけなくても免罪されている。
頼りになるのはお隣さん。力を合わせて、百点をとらせていく。

《参加者の感想より》

・一斉授業の大切さを見直す熱い話が聞けてよかったです。生身の人間相手の授業だからこそ、リアルでドラマが生まれる、そのおもしろさ、楽しさを忘れずに大切にとりくんでいきたいと思いました。
・授業をしていく中で、流行にのってとりあえず行うのは、リスクがあるなと思いました。授業は、ドラマだというお話を聞き、45分間の間にどれだけ、ワクワク・ドキドキさせられるのかなと思いました。直感が大事ということも、今までの積み上げがあるので、下積み時代をがんばっていこうと思います。
・教育のあり方について再度考えさせられる講演でした。個別最適化のために自由進度学習やデジタルコンテンツが発達していくけれど、それは、逆に子どもたちやクラスをバラバラにさせていくことにつながるのもとても共感できました。となりの子から学ぶ、基礎の模倣からを大事に、これからの授業へと生かしたいと思いました。
・愛＝成長を願うこととするならば、愛されるために生まれてきた子どもたちに「愛すること」を教えるための授業づくり、クラスづくりが大切だというお話が印象的でした。現在2年生の担任をしています。テスト勉強の慣習がなかなかつかないことに悩んでいましたが、となりの子と協力して100点をとるという取り組みを、月よう日からやってみようと思います。また個別最適な学びとは、それぞれの子どもが自分にとって最適な学びの力をつけることだということも勉強になりました。模倣と共同を大切にしながら授業づくりをしていきたいです。

【特別記念講演　赤坂真二
「明日も行きたい学級づくり」】

人間関係形成能力は学力。隣りの人がどんな人か分からず対人不安を起こす子が増えている。
担任は、学級の「見えないズレ」（本当の原因）に気づいているか？
先生の思いと子どもの受け取り方がズレている。
良かれと思ってしたことがズレを生む。
最初から自由のクラスには、自主性が生まれない。最初に枠を決めるから、自由に行える。
受容による信頼構築があり、しつけによって秩序が生まれ、その心理的安定性が和やかさへとつながっていく。
信頼とは、「相手はこうしてくれるだろう」を「まちがいない」と信じて行動すること。最大公約数の期待にこたえていくこと。
子どもたちが願っていることは、わかりやすい授業をしてくれることややる気にさ

せてくれること、分かってくれること、成長させてくれること。
やる気の起こる条件として、安心感（安全基地の存在）が必要。
つながる先生は、やる気を引き出す。専門性・一貫性・教師役割・つながりやすさ・安心感などが信頼の構造を作る。
学級の良好状態は一年もたない。教師の影響力には、賞味期限がある。
後半の学級経営戦略が必要。
「関係性のほころび」や早期発見とケア、行事や授業を通して、横のつながりを強化していく。
学級のルールを「自分ごと化」させ、権限を委譲していく。
子ども同士の協同場面を作っていく。
認知のズレを解消するために、承認の実感による、共通認識の枠組みづくりが必要となる。
共同注視。みんなで同じことをやれることには価値がある。没入体験が必要。
先生の価値観に乗ってくれる子を増やしていく受容的な指導が大切。

《参加者の感想より》

・自分自身、今、すごく学級経営にすごく悩んでいます。今日、たくさんのことを学ばせていただきました。子どもにたくさんのことを要求をし過ぎていますが、まずは子どもの思いを受容していきたいです。少しずつ、今日の学びを実践していきたです。
・今日の先生のお話の「先生の認知のズレ」、どきっとしました。アセスの数値でとらえることや「ズレ」に気づくことも、大事なことだと思いました。『勘や直感』だけで動いているところがある自分を見つめ直そうと思います。教師が「生徒の視点」を獲得できることになる相互理解のプロセスを大事にしたいと思います。赤坂先生のお話、大好きです!!ありがとうございました!!
・「学級の良好な状態は1年もたない」ときけて、そうだったのかと思いました。そのための後半の学級経営戦略を詳しく教えていただいて、とてもおもしろかったです。赤坂先生の研究分析と久保先生の実践が、ぴたっと一致していて、久保先生の実践の素晴らしさが証明されたように感じました。メタ認知するために他者が大切（メンターとメンバー）、研究サークルで学ぶことの価値を教えていただきました。これからも学力研を学んでいきたいと思います。
・「受容」と「承認」が先生として大切にしたいことだなと思った。子どもたち自身もそんな先生の姿を見て、子どもたち同士でもお互いに認めあい、高めあえる学級にしたいと思った。また、認知のズレは私自身も小さい頃からよく感じていたことなので、だからこそ、大人になった今でもその敏感さや思いを心に留め、決めつけであったり、表面的なことだけで判断してはいけないなと思った。また、良い意味でも悪い意味でも目立つ子にばかり注　意や関心が行きがちだけれど、そういう子ばかりに気をとられるのではなく、誰にでもスポットライトが当てられるように、岡本美穂先生にも教えてもらったのですが、具体的に小さなことでも行動や過程を言葉にして全体の前もしくは個人的に褒める認めることができる教員でありたいなと思った。

【鼎談　パネリスト：赤坂真二先生、久保齋、岡本美穂　ファシリテーター　深澤英雄】

深澤：鼎談は３つの柱。ファシリテーターは水を入れる役。
赤坂：教員養成17年、最初は自分の学んだことや実践を伝える。
今は、学術研究と実践研究が離れすぎているので、現場に落としこむ。
教師のマインド（信念）が大事。研究を通して信念を育てたい。

久保：先生のための学校、20年。初期は追実践を要求。久保のやり方の内のどれかをやれ！
　模倣が大切。通常は、教師は自分の受けた教育を模倣している。教育力をつけるためには、追実践が必要。
　現場が困難。お互いが交流。聞いてもらえる所が必要。
岡本：学校は何が正しいか分からない。熱量がない。出会いを出会いにしないと、つぶれる先生が多い。どんな先生になりたいか？指導案も児童観だけは自分で書く。何を大事にしたいのか？言語化していくことが大事。
久保：追実践のアレンジは否定。アレンジしたら結果が出ない。
　傷ついても失敗してもいいから、その通りやれ！小さな部分の技術をそれを考えた通りにやってほしい。
赤坂：なぜ、久保先生はこの発問をしたのか、原理・原則、開発者の同じ視座に立つことが大事。考え方が分からないといけない。
深澤：社会の多様化。どう生きていけばいいか。元気がほしい。
岡本：思った以上に大変。いろんなことがいっぱいふりかかってくる。
　子どものため、学校のためにやり続ける。
　子どもたちができるような瞬間、「先生！」と言ってくれる瞬間を大切にしていく。
久保：エンデ『モモ』、人間の時間の使い方、効率化しても幸せにならない。
　子どもは今のその瞬間が面白くないと、将来のためにするは、子どもに合っていない。
赤坂：夢・希望を持って教師になった人が3か月で辞める。
　現在、さも子どものためといって、過去問をさせ、経済だけを追いかけて、物を売るために個別化を進め、つながりを断ち切ってきた。
　そういうものへの怒りが大事。人とつながることで活力が生まれる。人のためにがんばることで活力が生まれる。

《参加者の感想より》

・岡本先生の「出会いを出会いにする」という言葉が印象に残りました。私は今回初めてこのような講演に、友人からの誘いで申し込み参加し、そこで先生のたちのコミュニティのあたたかさと熱さを感じました。教師としてやっていくことへの不安がとても大きかったですが、今回このような場を知ることができ、私も自分の中で不安をうずまかせるばかりでなく、積極的に教壇に立ちたいなと思いました。
・エネルギー補給できました!!!
・追実践をしたことが今までなかったのですが、今日の鼎談を通して、先人のすぐれた実践から、発問の意図を考えたり、模倣を通して学んだり、しながら授業を更によいものにしていくことも必要だと感じました。先生方の熱さにまた、来週からも頑張ろうと思えました。楽しい講演ありがとうございました。
・先生方のお話をうかがって、アプローチの仕方はちがうように見えますが、教師としての“在り方”は共通しているのを感じました。時代が変わっても、人を大切にする”という視点は変わらないことを再認識しました。なんか、こういう話を職員室でもできたら楽しいだろうなと思いました。
・先生の「信念からしか教師の力量を伸ばす方法はない」は、なる程と思いました。しかし、今の職場は働き方改革からか、そういう信念を話し合う機会が全くないです。以前は、職会や放課後、そういう信念を話し合っていました。そしてその信念のぶつかり合いの中で、さらにブラッシュアップしていたように思います。

局長だより　11月

◇学力研最新情報　岸本　ひとみ

●研究授業は何のため？

　１０月１１月は、どこの学校でも、研究授業があります。大規模校だと、毎日のようにどこかのクラスの公開授業をしています。その準備のために、ふだんとは違う掲示物を作ったり、タブレットを使ったり……。その一時間のためにだけする膨大な準備作業を思うと、気が滅入ります。どうして、ふだんの、いつも通りの授業を公開しないのかしらん、と毎年この時期になると憂鬱になります。その日だけが、発表会気分の子どもたち、正装の先生、お手盛りの反省会。

　そんなの意味がないのではないでしょうか。ふだんの子どもたちの様子、いつもの授業風景、準備が間に合わない時には、どうやって切り抜けているのか、そういったものの方が、ずうっと同僚さんを励ますはずです。

　さらに困るのが、このお手盛り感がより強大になってしまっている指定校の研究発表会です。責任出席とやらで、参加してみても、華やかだけれど、子どもたちの表情が何だか暗いのでは、本末転倒です。

●子どもの実態からスタートする

　いろいろできていないことも多いけれど、今年の子どもたちの強みはこれだから、それを参観してもらう、というスタイルになれば、みんなとても楽になります。参観する側も、質問する気持ちにもなります。

　指定校研究もけっこう。たまには、いつもと違う視点の授業をしてみるのも、視野が広がっていいとは思います。でも、一番大事にしたいのは、子どもたちに達成感があるかどうかだと思います。

　研究授業ありき、に陥ってしまわないように、忙しさに振り回されて、子どもたちの気持ちと乖離してしまわないように、気をつけたい秋です。

◇事務局だより　岡本　美穂

■先生のための学校

今年度後半も、実践にすぐ生かせる学びが続きます。各回とも参加者同士で交流できる「困ったことなんでも相談会」を実施します。ぜひご参加ください。

第二回　十一月十四日（土）

講師　李　詩愛

「予習を生かして、
　どの子も参加できる国語授業」

講師　久保　齋

「社会科教科書を活用した読解力・
　思考力を育てる授業」

第三回　十二月十九日（土）

講師　深澤英雄・岡本美穂

「教科書とノートで変わる
　社会科授業」

講師　久保　齋

「数感覚と読解力を伸ばす
　算数授業」

第四回　一月九日（土）

講師　図書啓展

「つまずきを楽しく乗り越える
　算数学習」

講師　久保　齋

「理科好きにする
　問題づくりの工夫」

※ハイブリッド講座
　（オンライン併用）

第五回　二月十三日（土）

講師　荒井賢一

「子どもの『やりたい』を引き出す理科・生活科授業」

講師　久保　齋

「真の読解力を育てる国語授業」

申込はこちら

https://www.kokuchipro.com/event/d20cad3daaa7084e3fb3df1995f5b0de/

参加費：２０００円（会員割引有）

会場　：たかつガーデン（上本町）

学力研カレンダー



≪各地のサークル・部会　２０２６年　１１月　例会、イベント≫

どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしています。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

11/

２０（金）いろえんぴつ　18 時～　コミュニティーセンターおおべ　岸本 090-9117-6330

２１（土）みなみ学力研　9 時 45 分～12 時　阿倍野区民センター　図書 nobu580701@yahoo. co. jp

２７（金）春日井学力研　18 時半～　レディヤン春日井　山口 080-6904-1697

２８（土）大阪教育サークルはやし　午後　エルおおさか　荒井 aik28501@bca. bai. ne. jp

社会科実践研究会　李 iwamotoshie@gmail. com

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

他サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等はご連絡ください。

○　伊丹学力研　18 時半～　伊丹市役所横サイゼリヤ　前田 090-9715-3830

《全国キャラバン等　今後の予定 》

○　**学力研 １年生講座**　11月28日(土) 13:30～14:30 オンライン

○　**先生のための学校**（於たかつガーデン）

今後の予定（10/17 済・11/14・12/19・1/9・2/13）

11月14日(土) 13:00～17:00

講師　李詩愛「教科書の予習を通して、どの子も国語が楽しく参加できる授業づくり」

久保齋「社会科教科書の読解記憶･論理の記憶でどの子も伸ばす授業づくり」

困ったことなんでも相談会

（詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで）

（講師派遣希望、サークル情報などは　事務局へ　079-426-5133）

ご意見・ご感想は下記まで

荒井　賢一　E-mail　aik28501@bca.bai.ne.jp

李　詩愛　E-mail　iwamotoshie@gmail.com

堀井　克也　E-mail　katsuya4k1h9@gmail.com

古東　秀一　E-mail　kohigasi1201@gmail.com